

〈論 説〉

ナポレオン帝政と近代フランス国家の形成

高 村 忠 成

目 次

1. はじめに
2. ナポレオンⅠ世の生涯
3. フランス革命とナポレオンⅠ世
4. ナポレオンⅠ世の業績
5. ナポレオンⅠ世後の世界
6. ナポレオンⅠ世の目標
7. ナポレオンⅠ世の遺訓
8. ナポレオンⅢ世の生涯
9. 2月革命とナポレオンⅢ世
10. ナポレオンⅢ世の業績
11. ナポレオンⅠ世から受け継いだもの
12. むすびに

1. はじめに

本稿で論じる問題は、ナポレオン帝政が近代フランス国家の形成にどのような影響を与えたか、ということです。その際、特にここでいうナポレオン帝政とは、ナポレオンⅠ世（1769-1821）による第一帝政（1804-1815）と、ナポレオンⅢ世（1808-1873）による第二帝政（1852-1870）の両方を指します。この2つの帝政による統治体制、理念、構造などを指してボナパルティズム（bonapartisme）と呼ぶことは、よく知られているところです。

ナポレオン帝政というとすぐに軍事体制、独裁政治であったということが想起され、批判の対象となることが多くあります。特に、フランス革命以来の民主政の流れを遮断し、それを後退させたと言われ、その反動的性格が指摘さ

れています。そうした面があったことは否定できないかもしれませんが、しかし、またナポレオン帝政が革命の原理を守り、新しい国家体制を築いたことも無視できません。そのため、私がここで論じようとするのは、ナポレオン帝政がフランス革命の原理を守護し、それにもとずいてフランスの近代国家形成に影響を与えた。否、ナポレオン帝政がなければ、フランス革命は失敗に帰し、保守反動の体制はもっと加速したであろう、ということです。換言すれば、フランス帝政の、革命の原理に立脚した近代国家形成に果たした役割を分析、考察してみようというのが本稿の目的です。

その際、特に、ナポレオンⅠ世とナポレオンⅢ世の関係にも焦点を当てました。ナポレオンⅢ世は突然現れてきたわけではありません。彼自身の帝政復活にかける意欲、大志、夢の現実が第二帝政であったのです。ナポレオンⅢ世はどのようにしてナポレオンⅠ世の意思を受け継いでいったのか、にも考察のメスを入れていきます。

通常ナポレオンというと、フランス革命後の混乱した時代を平定したナポレオンⅠ世のことを指します。彼によって、第一帝政という時代が開かれました。しかし、ナポレオンを考える場合、大切なことは、彼の時代だけで、「ナポレオンの時代」は終わりをとげたというわけではないということです。

ナポレオンⅠ世の志は、ある意味では夢半ばで途絶えてしまったといつてよいかもしれません。そのナポレオンⅠ世の理想を受け継ぎ、彼の事業を完成させようという人物がいました。それがナポレオンⅠ世の甥であるナポレオンⅢ世なのです。この人の力によって、フランス第二帝政が開かれました。そして、彼はナポレオンⅠ世以上の業績をあげた、といわれています。したがって、ナポレオンⅠ世の時代とナポレオンⅢ世の時代をあわせて「ナポレオン帝政」とここでは呼ぶことにします。

この時代に、フランスは近代国家の基盤を築くことができたのです。逆にいうと、2人の「ナポレオン」が出現しなかったならば、フランスは、近代国家としての力をつけるのが少々遅れていたかもしれません。2人のナポレオンの存在は、近代フランス国家の形成にとって、じつに大きなものがあったといつてよいでしょう。2人のナポレオンは新時代を開くために挑戦を重ねていった人物なのです。高い志をもち、理想実現の夢に燃え、不断の努力を怠らなかつ

た、執念の人であったのです。以下、本稿でこの点を論証していきます。

2. ナポレオン I 世の生涯

まず、ナポレオン I 世の生涯を簡単にみておくことから始めたいと思います。1769年にナポレオンはコルシカ島に生まれました。ナポレオンが20歳の時、すなわち1789年にフランス革命が勃発をしました。1799年、フランス革命から10年経ってナポレオンはクーデターを起こします。これを「ブリュメール18日のクーデタ」と言います。彼は政治の実権を奪います。第一統領という今日でいう大統領職に就任します。その5年後、1804年に彼は皇帝に就任し、新たな体制を開きます。これを「第一帝政」と言います。それから10年、ナポレオンは皇帝の地位にいましたが、1814年、彼は「諸国民の戦争」という戦争に敗れ、皇帝を退位します。そしてエルバ島という島に流されるのですが、その島から再び兵を起し、翌年1815年に皇帝に復位します。だが「ワーテルローの戦い」イギリスやプロイセンなど対仏同盟国を相手に戦い、またも敗れました。その結果、大西洋上の絶海の孤島、セント・ヘレナ島へ流されてしまいます。それから6年後、1821年、この島で死去します。享年51歳でした。

3. フランス革命とナポレオン I 世

つぎに、ナポレオンとフランス革命の関係についてみておきたい²⁾と思います。ナポレオンはコルシカ島に生まれました。父は弁護士で、貧乏貴族でした。この時代、貧乏貴族が出世するには軍人になるのが早道でした。父はナポレオンをフランスのブリエンヌというところにある幼年学校に入れます。この幼年学校は将来の軍人を作る学校ですが、軍事の勉強ばかりをやっているわけではありません。歴史、数学、地理、国語、文学、あらゆる学問を叩き込まれるのです。

ナポレオンは幼年学校時代、苛められっ子で、フランス語もあまりよく出来ません。こういう境遇にあったためか、図書館に閉じこもって本ばかり読んでいました。その結果、ナポレオンは確かに当初はフランス語があまりよくできませんでしたが、猛烈な努力の結果、ギリシャ・ローマ時代の古典からフラン

ス近代啓蒙時代のジャン・ジャック・ルソーなどの本まで、読破していききました。

ちなみに、当時の軍人というのはいうまでもなく、国王のもとでの、国王のための軍人です。すなわち、王政を支えるための支柱なわけです。ところが軍人ナポレオンに大きな転機がおとづれました。それが1789年のフランス革命だったのです。

フランス革命というのは、それまでの国王中心の社会、すなわち国王がいて、その下に僧侶、貴族がいて、平民がいるという厳格な身分体制、封建的な絶対王政という体制に異論を唱えたものです。第三階級というブルジョア階級が立ち上がって王政を転覆させてしまう。すなわち、これからは国王が中心ではなく、人間は生まれながらにして自由であり、平等であり、友愛の理念をもち、人権という感覚をもっていかなければいけないと主張するのです。その結果、国王が支配するというようなピラミッド型の、いわゆる「封建支配体制」、アンシャン・レジームはもはや時代遅れであると否定し、王政を倒してしまったのです。これがフランス革命です。

フランス革命が起こった時、ナポレオンは軍人ですから、本来は、王政を支持する立場だったのです。しかし、フランス革命勃発とともに軍人の中も二つに分かれてしまいます。王政を支持する派と、王政は古い、体制を変えようという派に分かれてしまうのです。ナポレオンはどちらを選んだのか。彼は迷うことなく、後者を選びました。ナポレオンは、啓蒙思想の影響を強く受けていたのです。そのため、王政はもう古い、これからは「自由」「平等」「友愛」「人権」という理念に立脚した国を作るべきであるというわけです。ナポレオンは王政のもとで軍人でありながら、革命派の軍人になってしまうのです。これがナポレオンの人生の道を大きく分けてしまうことになりました。

したがって、もしフランス革命がなければ、ナポレオンは平々凡々たる王政のなかの一軍人として終わってしまったかもしれません。ところがフランス革命が起こって、革命派についたため、その革命派の中で、たちまち主導権を握る軍人へととなっていくのです。もちろん、その間、さまざまな事情が働いていましたが、ここでは詳細は割愛します。

1789年にフランス革命が勃発した後、1799年の「ブリュメール18日のクーデ

タ」まで、ナポレオンは10年間の時間を必要とします。これは何を意味しているかという、フランス革命によって王政を倒し、「自由」「平等」「友愛」「人權」の理念に基づいた新しい國家を作るといっても、そう簡単にはいかなかったのです。

なんだかんだいっても、王政が長期間続いてきたわけですから、その王政を倒し、國王の首を切ったからといって、すぐに新しい政治、社会の安定、經濟の發展が見られたわけではありません。革命を起こした側もいろいろと分裂し、もっと急進的に革命を推進しようとか、あるいはもっとゆっくりやろうとか、いやその中間でいいのだとか、革命側が各派に分裂してしまうのです。いわゆる「急進派」、「穩健派」、「中道派」です。そのため、フランス革命後の社会は大混乱に陥ってしまいます。王政は悪かったが、ある意味では、王政を倒したフランス革命後の時代のほうが、もっと悪くなってしまった、という声があがるほどでした。

軍人ナポレオンはこうした社会の動向をずっと見ていて、これではダメだ。もうフランス革命を起こした政治家たちに政治の実権を預けておくわけにはいかない。「自分がやろう。自分が立つしかない」、とナポレオンは決意します。そして、「ブリュメール18日のクーデタ」を起こして、それまで政治の実権を握っていた革命派の政治家たちからその権力を奪い取ってしまいます。そして自らが第一統領、すなわち大統領という地位について、フランス革命の原理を守り、それに立脚しながら社会を安定させ、國家を發展させていくために全力をあげようとするのです。フランス革命とナポレオン³⁾というのはいかような関係になっているのです。

したがって、繰り返しますが、もしフランス革命が起こらなかつたならばナポレオンは王政派の目立たない、一介の軍人で終わってしまったかもしれない。しかし、もしナポレオンがいなければ、フランス革命は失敗していたかもしれません。政治・社会の秩序が乱れ、經濟が混乱し、再び昔の王政の時代に戻ってしまったかもしれないのです。それほどフランス革命はナポレオンによって守られ、革命が成功した、と言っても過言ではないのです。

4. ナポレオン I 世の業績

ナポレオンは、1799年に政権を奪取した後、どのような業績をあげたのでしょうか、主なものを見ていくことにします。

第1に、「社会的な融和」を図ります。すなわち、革命は社会に大きな亀裂を招いてしまいました。ブルジョア階級が立ちあがって、僧侶や貴族を弾圧し、農民に僧侶や貴族の土地を分け与えてしまいました。王政時代には、国王、僧侶、貴族、ブルジョアという階級間の身分差別はありましたが、各身分間でそれほど激しい対立はありませんでした。階層的身分秩序が固定していたのです。ところが、フランス革命は、この身分秩序を打破するとともに、階級間に激しい対立をもたらしてしまいました。ナポレオンは、革命によって人々がお互いに疑心暗鬼となって対立・抗争を招くという状況に終止符を打ちました。新しい社会秩序を構築したのです。人材の登用にあたっても、名門とか貴族の出であるとか、大ブルジョアジーの子どもであるとか、そういう身分、出自で判断するのではなく、あくまでも能力主義、功績主義で人を用いました。

第2に、ナポレオンは「社会の安定」を図ります。前述したとおり、フランス革命によって社会は大混乱してしまいます。その混乱した社会体制、政治体制、経済体制をナポレオンは安定させるのです。ナポレオンは「独裁者」であると批判されます。それに対して、ナポレオンは次のように反論します。「世の人々は私のことを独裁者というであろう。でも、もし私がここで強い権力を発動しなければ、世の中は混乱し、革命は失敗に終わる。旧時代に戻ってしまうであろう。したがって、政治権力は、今は、強くなければならないのである」、と言います⁴⁾。たしかに、ナポレオンが権力を握った当初は、革命が王政を倒し、しかも倒した革命派が分裂して、「急進派」「穏健派」「中道派」に分かれ、世の中はバラバラでした。そうした混乱の世の中を立て直すためには、ある程度、政治権力は強固である必要があったのです。

第3に、「宗教政策」です。ナポレオンは高い理想を掲げておりましたが、打つ手は非常に現実的でした。フランスのブルボン王朝時代、農民の75パーセントはカトリック教徒でした。そしてカトリック教会と王政が結びついていたのです。「国王に忠誠を尽くすことが神に救われることである」、と教えていたわ

けです。それに対して、フランス革命の革命派の人々は、そんなことはない、国王に忠誠を尽くすから救われるなどということはありません、と言って王政を否定するとともにカトリック教会をも拒否してしまったのです。カトリックの信仰さえもとりあげようとはしました。

こうした事態にナポレオンは考えます。農民の75パーセントが敬虔なカトリック教徒である。この農民に「カトリックの信仰を捨てよ」「キリスト教を信じるな」、ということはむしろ非現実的である。ナポレオンは自らは信仰はもっていません。無神論者でした。しかし彼は、宗教というものが人心や社会を安定させるうえで、非常に重要なものであるということは認識しておりました。「宗教は、魂の休息であり、希望であり、不幸な人々の頼みの綱である」、と言って、ナポレオンはカトリックの信仰をしている人の信教の自由を認めたのです⁵⁾。

ただし、ブルボン王朝時代とは違って、カトリックは「国教」とはしない。「フランス人の大多数の宗教」であるというように位置づけました。国教ではない、としたのです。こうしてフランス人がキリスト教を信ずること、しかも当時まだ少数派であったイスラム教を信ずること、ユダヤ教を信ずること、あらゆる宗教を信ずることをナポレオンは認めたのです。そして、カトリックを信ずることを認めるから、ローマ法王はナポレオンの共和国を正式に国家として承認してもらいたいと要求しました。これを「宗教協約」といいます。これにより、人々の精神的安定と統一がはかられました。さらに、ナポレオンの政治と宗教を分ける措置によって、フランスにおける政教分離の考え方の基礎が作られ、それは近代国家の基本原則へと発展していったのです。

第4に、「民法典の編纂」です。民法は私たちの生活にとって重要な法律です。財産関係、親子・親族関係など、私たちの私人間の契約を決める法律が民法であり、民法がきちっと定まっていなくて人々の社会生活は混乱してしまいます。ナポレオンの時代以前にも民法はありましたが、地域によってまちまちでした。その内容も非常に封建的な、古いものでした。ナポレオンは、人々の人間関係を安定させることが社会に秩序をもたらすことになる。そのためには、フランス革命の「自由」「平等」「人権」という理念に基づいた新しい民法典を編纂することが急務である、と言ってこの事業に取り組みます。

民法典が完成するまでに102回の審議が行われました。ナポレオンは、57回、

その審議の会議に出席して、2281条からなる「フランス人の民法典」という民法典を制定します。「宗教協約」によって人々の精神面の安定を図り、「民法典」によって人々の世俗面での生活の安定を図りました。「宗教協約」と「民法典の編纂」は、ナポレオンの業績の中でも特に光を放っているものです。

ちなみに、フランス民法典は世界に大きな影響を与えました。イタリア、オランダなどヨーロッパ35カ国に、また中南米の35カ国の民法に、合計70カ国の民法にこの民法典は影響を与えたのです。日本では法律の文章というとなみづらいますが、ナポレオンの民法典は非常に名文でして、文豪スタンダールは、民法典を日々数カ条ずつ読み、暗記しておりました。自分の文体の手本にしたと言われております。それ程、この民法典は各条文が名文でできているのです。

第5に、「行政機構の整備」です。ナポレオンは、不可分の単一国家、フランスの新しい国民共同体、これを作るには行政・官僚機構をきちっと整備する必要があるというを痛感しておりました。この行政・官僚機構のなかには、警察機構の強化も含まれます。ナポレオンは「近代官僚制国家の生みの親」とも言われております。「ナポレオン時代ほど行政が強力で、仕事に熱心な時代はなかった」、という評価が与えられるほどスムーズに国の行政がなされていったのです。

第6に、「公教育の充実」です。王政時代の教育は、キリスト教と結びつき、キリスト教の教義、教えを授けるというのがその中身でした。王政時代の教育は、宗教教育といってよいでしょう。ナポレオンはこの教育からいわゆる宗教的な内容を弱め、新たな共和主義的な「公民教育」を行うのです。その中味は、人間の「自由」、「平等」、「友愛」、「人権」という理念を基にしたものです。特に、国家を強固にするため、有能な人材を育成することに主眼をそそぎます。公教育施設として小学校を作り、特に中等教育、エリート教育に力を入れます。今日でもフランスというと、エリート教育の国として有名ですが、その基盤は、革命時代からはじまりナポレオンによって強化されます。「国家を担い、国家を発展させる基盤は人材である」、というのが、ナポレオンの信条でした。

第7に、「経済発展」があげられます。「経済発展」といっても、ナポレオンには順序がありました。どうすれば経済発展するか。まず国家の「財政」がしっかりしていること。国の財政基盤が確立していないと経済発展の土台がもろくなる。そして、国の財政を安定させるためには、金融がしっかりしていなくて

はならない。そのためには、中央銀行という銀行を作る必要がある。中央銀行を作って金融政策を確立し、その上に国の財政基盤を安定させることが肝要である。そのために大事なのが「税制」です。革命はほとんどが税金をめぐる争いが原因となっていました。ナポレオンは公平な税金の徴収の方法が人々に不満を抱かせない重要なポイントであるとして、税制の整備をしっかりとほかります。このように国の財政・税制制度の整備、中央銀行の確立を行なったうえで、産業の発展に力を入れます。

新規事業には助成金を与え、税金を還付します。ナポレオンの時代には「起業」が、いろいろ生まれました。たとえば「瓶詰め」、「電池」、「鉛筆」らはナポレオンが発明させたものです。特に新しい発明には賞金を惜しみなく与えました。

こうしたうえに、ナポレオンは農業が大事であり、国の発展の基盤は農業であると位置づけます。「農業、それは魂であり、帝国第一の基礎である」というのです。⁷¹ 農業の上に工業や製造業があり、つぎに商業があるとします。「農」「工」「商」という順番をつけたのです。⁸⁾

日本でも今、農業の見直しということが盛んにいわれております。日本の場合は食糧自給率が40パーセント位しかありません。私たちはフランスというパリ、パリがフランスだと思ってしまうのですが、実はパリというのはある意味ではフランスではないのです。パリから一步外に出ますと、フランスは大農業地帯です。日本の国土面積の1.5倍くらいありまして、人口が日本の約半分です。日本の人口は約1億3千万人、フランスは約6千万人です。日本の国土はほとんどが山ですが、フランスは大部分が平地です。ですから日本とフランスを農地利用という点から比べると段違いです。食糧自給率でもフランスはほぼ100パーセントです。むしろ輸出していると言っても過言ではありません。それほど恵まれた環境にあるのです。それでもナポレオンは、「帝国第一の基礎は農業である」と力説しました。

さらに、ナポレオンは商業の発展を円滑に行うために、いわゆる「インフラ」の整備をはかります。たとえば道路を補修したり運河を作ったり、港湾を整えます。商業発展のために必要な社会的な基盤整備を行ったのです。そうしてナポレオンは完全雇用を達成します。統計によりますと、フランス産業はナポレ

オンの時代に25パーセント成長したといわれております⁹⁾。ナポレオンは後に誇らしげに、「フランスの産業を創造したのは私である¹⁰⁾」と胸を張ります。

第8に、「公共事業の展開」です。公共事業、すなわち、道路・橋を作ったり、港湾を整備したり、運河を開いたり、また下水道を設けたりするものです。また広い意味では、病院・監獄とかいうものの改善をはかります。あるデータによると、ナポレオンの時代14年間の公共事業は、18世紀100年間のそれを上回る、という記録があります。そして、これも一種の公共事業といえるかもしれませんが、都市の整備、美化に全力をあげるのです。

ナポレオンは、ギリシャ・ローマ時代の古典を読み漁っておりました。ローマの街、これを世界で最も美しい街とナポレオンはみておりました。そのため、ナポレオンはパリをローマ以上に美しい街にしようということで、パリに記念碑を建てたり、凱旋門を作ろうとしたり、ヴァンドーム広場に戦勝の記念柱を建てたりします。パリを世界一の都市にするというのが、彼の夢でした¹¹⁾。

ナポレオンは、以上のような事業を通して、何と言っていたかといいますと、「私の政策は多くの人々が望むように人々に奉仕することである。それこそが人民主権の何たるかを示す方法である」、と、語りました。すなわち、フランス革命では「人民主権」、「主権は人民にある」ということがさげばれました。この人民主権は一体何を意味するかというと、これは「多くの人々が望むように人々に奉仕することである。多くの人々の期待に応えるように多くのことをやってあげることである。これが人民主権を行使するということである」、とナポレオンは言って、今、のべてきたようなさまざまな事業を遂行してきたのです¹²⁾。これこそ、近代国家形成の基盤になる仕事だったのです。

なお、ここではあまり触れられませんでしたでしたが、ナポレオン1世は、エジプト学という学問を興したり、ルーブル美術館を整備したり、チュイルリー宮殿を改築して美術館にたてかえたりと、学問や文化の発展にも大きな寄与をしてきたのです。

以上、ナポレオンがフランス革命以後、どういうことをやって政治の安定、社会の発展を期したか、ということ述べてまいりましたが、これだけの事業をみてもお分かりのように、彼は戦争をした、あるいは独裁制をしいた、というのは、あくまでも一つの側面です。ナポレオンの別な面は、そうした戦争と

か独裁とかという側面よりもはるかに大きく、世の中を安定させ、経済を大きく発展させたところにあります。こちらのほうに彼は全力を注いだのです。

ナポレオンはフランス革命の混乱の中から大きく飛躍し、飛翔し、そして「あのナポレオンが」と人々に思わせるような事業を次ぎから次ぎへと行っていったのです。しかも、彼は子ども時代は病弱でした。その病弱なナポレオンが青年から大人になっていくにしたがって、様々な仕事をしていくなかで、身体もだんだんと頑健になっていきます。フランス語も話せなかったナポレオンは、書物を読み漁り、学校の成績は良くありませんでしたが、勉強という面では誰よりも努力しました。その結果、フランス人以上にフランス語を上手に話すようになっていく。また、フランス人以上にフランスという国家を愛し、フランスを近代国家にடுத்தあげていきます。

ナポレオンという人を見て、意外だと思うことが3つあります。一つは、ナポレオンは最初から偉大な軍人や政治家ではなかったということ。これはじつに意外です。最初は苛められっ子で、目立たない平凡な軍人でした。二つに、ナポレオンの偉大な業績は何百年、何千年もかけて行われたわけではなかったということ。わずか十数年間の仕事であったということです。これはすごいことだと思えます。三つに、ナポレオンを後世にまで有名にしているのは、むしろ戦闘や独裁ということよりも、彼の前述した数々の政治・社会・文化的業績が後々まで彼の名前を残していったということです。この点を強調しておきたいと思えます。ナポレオンを単なる軍人、独裁者として見る見方は誤解を招くといってよいでしょう。新しい視点が必要なのです。それは、ナポレオン1世の数々の業績こそ、近代フランス国家形成の土台を築いたといえるのです。

5. ナポレオンI世後の世界

ナポレオンI世がイギリス、プロシヤとの戦争に敗れ、セント・ヘレナ島に流されたあと、フランスの政治はどうなったのでしょうか。それは、既に知られているように王政が復活したのです。復古王政、七月王政と続きます。だが、フランス革命の残した遺産は消えず、再び王政が倒れ、共和政（第二共和政）が誕生します。しかし、その共和政の時代は短く、1852年には帝政（第二帝政）

が出現します。このあたりの歴史の流れは、絶対王政からフランス革命、第一共和政、そして第一帝政の誕生という過程とよく似ています。すなわち、フランスは、王政、共和政、帝政という政治体制の変化を同じサイクルで二回繰り返すのです。

歴史の流れをなぞってみれば、以上のとおりですが、しかし、歴史を動かす主体は人間であるという観点からみると、このような歴史の歯車を動かす原動力のひとつになっていたのは、ボナパルト一族であったということが見て取れます。すなわち、ボナパルト家の再興を願うナポレオンⅠ世の甥ルイ・ナポレオン・ボナパルトの意思が強く動いていたのです。何としても伯父であるナポレオンⅠ世の夢を再現して見せる。帝政の復活を果たす、との彼の強い執念が歴史を大きく動かしたのです。そして、それは実現しました。1852年、フランスに第二帝政が誕生したのです。

以下、ナポレオンⅠ世の夢、構想を再現した男、ルイ・ナポレオン・ボナパルト（後のナポレオンⅢ世）の生涯、業績に話を移していくことにします。

6. ナポレオンⅠ世の目標

ナポレオンⅠ世の目標、夢、大志とは、何だったのでしょうか。この点を確認しておきたいと思います。

第1に、「政治の安定と経済の発展」です。フランス革命後の混乱した政治を安定させ、経済を発展させる。それを、革命の理念に立脚したうえでなしとげる。特にナポレオンの前には、イギリスが立ちはだかつておりました。イギリスは、17世紀にはすでに産業革命に成功し、稀にみる経済的な発展をとげておりました。フランスはそれから遅れること約100年。なんとかイギリスの経済発展に追いつき追い越せということで、ナポレオンⅠ世は全力をあげるわけです。それを彼はフランスの政治を安定させたいで行ない、フランスを近代的な国民国家へと完成させていこうとするのです。これがナポレオンⅠ世の第1の目標でした。

第2に、「ヨーロッパの統一」です。ナポレオンⅠ世には、子供の頃、フランス語ができないというコンプレックスがあり、それだけに彼は図書館に閉じこ

もって古今東西の、特に古典を読み漁るのでした。その結果ナポレオンには、ハンニバル、ジュリアス・シーザー、アレキサンダー、フリードリッヒ大王のことが脳裏に焼きつきます。これらの人々は、言うまでもなく、世界的な英雄であり、世界を一つに統一しようとした人たちでした。そうした先人の理想を受け継いで、ナポレオンⅠ世は、「ヨーロッパがこのように小さな国に分かれていては何も偉大なことはできない。ヨーロッパは一つになるべきだ。一つのヨーロッパ帝国をつくらなければならない¹³⁾」、こういう理想を抱くようになってまいります。彼の言葉を聞きますと、たとえば次ぎのように言っております。

「私は後世を目指してのみ生きています、基礎を築くために努力しています。

私は一つの立派な行政組織を打ち立てたいのです。私は確信していますが、必ずいつの日にか、『西洋帝国』がふたたび生まれるのが見られるでしょう。』¹⁴⁾

このようにナポレオンは西洋帝国の建設ということを言うのです。また彼は次ぎのように言います。

「私はもっと高い思想にあこがれていた。私は国内の諸々の党派を融和させていたのと同じ様に、ヨーロッパの諸国の大きな利害の融和を準備しようと思っていた。』¹⁵⁾

ナポレオンはフランス国内のいろいろな党派を融和させ、一つの国家としてまとめようしました。それと同じようにヨーロッパのいろいろな国々を統一し、一つのヨーロッパとしてまとめたいという理想をもっていたのです。そのヨーロッパにおいて共通の通貨、共通の度量衡、共通の言語、そういうものが用いられるならば、ヨーロッパはさらに発展するであろうという考えを懐いておりました。

ヨーロッパの統一という考え方は、古くはジュリアス・シーザーの時代にローマ帝国がヨーロッパという地域を手中に収めた頃からあり、その後も、何かの折にヨーロッパを一つの国家に、という理想は消えては現われ、現われては消えたりしておりました。ナポレオンⅠ世もその構想を懐いていた一人にして、ヨーロッパの統一ということを念願にしておりました。

以来約200年経ち、EUというヨーロッパ連合が、27カ国からなる一つの共同体組織として完成しつつあることを考えると、ナポレオンたちの夢が、今実現しようとしているという思いを深く致します。

第3に、ヨーロッパの統一だけにとどまらず、「東西両文明の融合」ということをがあげられます。アレキサンダー大王が西洋と東洋の統合をなそうとしたように、ナポレオンⅠ世もヨーロッパを統一した後、東洋と西洋を結びつけようという壮大な計画を練っていたのです。この点について、彼の言葉を引用いたしますと、次のようなものがあります。

「このちっぽけなヨーロッパではたいした栄光は期待できない。オリエントに行かなければいけない。オリエントこそ、あらゆる栄光の源泉だ。¹⁶⁾」

ナポレオンがいう「オリエント」とは、現在でいえば中近東あたりのことでありますが、彼の意図のなかには中近東を越えて、さらにインド、中国への道というものがあったのです。ナポレオンは、セント・ヘレナ島に流されていた時、お付きの者に自分の人生のこれまでを振り返って話をいたします。そのお付きの人はナポレオンの話をいわゆる口述筆記して残します。そのなかに次ぎのような箇所があります。

「皇帝は、特にアジアに注意を向けられた。ロシアの政治状況や、同国がインドや中国にまで企てることの容易さ。それに関してイギリス人が抱いているにちがいない不安。(中略) 皇帝は、これらの点のほとんどに関し、きわめて貴重な詳述を加えられた。¹⁷⁾」

このようにナポレオンには、オリエントからインドへ、インドから中国へと、アジアへの思いをはせるのです。そして、アジアと、ヨーロッパを結びつけるという構想を懐くのです。また付き人の証言を聞いてみましょう。

「ついで皇帝は、そのシリア遠征に触れ、そしてエジプト遠征の主要な目的として、オリエントの全局面を変えインドに新しい運命を与えうる革命を導きつつ、世界の4つの部分でのイギリスの勢力をくじくということに置かれた。¹⁸⁾」

このようにナポレオンⅠ世はシリアからエジプトへと思いを馳せます。その目的は何か。エジプトの先にあるインド・中国、こうしたアジアの地域とヨーロッパをイギリスに先駆けて結びつける。こういう構想を彼はもっていたと、セント・ヘレナ島で語っているのです。

このように「ナポレオンⅠ世の目標」は、フランスの政治の安定と経済の発展、また、フランス一国のことだけではなくヨーロッパの統一、さらに、ヨー

ロップのことだけではなく、東西両文明を融合させるという、壮大な夢ともいべきものと結び付いていたのです。

ナポレオンⅠ世は、ワーテルローの戦いに破れ、セント・ヘレナ島に流されてからが凄いです。セント・ヘレナ島という大西洋の絶海の孤島で、イギリス軍の監視下に置かれます。それでナポレオンⅠ世はすべて負けたわけではありませんでした。セント・ヘレナ島に流される船上から、彼は自分自身のこれまでの人生を振り返って、これまで自分がやってきたことを記述し始めます。そして、これから自分がやろうとする計画も語っていく。それをナポレオンの付き人、ラス・カーズという人が、筆記するのです。それは、すぐに本になってあらわれます。『セント＝ヘレナ覚書』という本です。ナポレオンがセント・ヘレナに流されている時から、その本はフランスやヨーロッパに出回っていきます。それを読んだ多くの人は、「ナポレオンはこんなことを考えていたのか」、「このような理想を懐いていたのか」と理解し、それはやがてナポレオンへの共感に変わっていきます。

この『セント＝ヘレナ覚書』という本がベースとなって、やがて「ナポレオン伝説」というものが生まれます。そして19世紀は、この「ナポレオン伝説」が全ヨーロッパに広まりまして、特にスタンダールとかヴィクトル・ユゴーとか、いう人たちがナポレオンを恋慕うのです。「ナポレオンは凄かった」、「ナポレオンは偉大であった」、「ナポレオンはロマンであった」と絶賛します。文豪たちはナポレオンを偲び、彼をテーマに文学作品を書いていきます。それが19世紀中に「ナポレオン伝説」に輪をかけ「ナポレオン、恋しや」との人々の気分を高揚させていくのです。こうした時代の気風が、後にお話するナポレオンⅢ世の台頭に大きな影響を与えてまいります。強い基盤になっていくのです。

こう考えると、ナポレオンⅠ世の戦には刮目すべきものがあります。セント・ヘレナ島に流されるまでの彼の戦いにも凄いものがありましたが、流されてからもなおすさまじい。彼は、セント・ヘレナ島でじっとしていたわけではなく、口述筆記で本を編み出し、それをフランスをはじめ全ヨーロッパに広めていく。そして、自分の思想で世界を席卷していく。こういう戦いを展開したのです。

7. ナポレオン I 世の遺訓

こうしたなかでナポレオン I 世が後世の人に残した遺訓、とくに自分の後を継ぐ人のためにどういう遺訓を託したのか。これには、大きく 3 つあります。

第 1 に、「未来は知性であり、産業であり、平和である¹⁹⁾」ということです。これは有名な言葉です。ナポレオン I 世は、確かに自分の時代は戦争であった。戦いであった。しかし、これからの時代というのは、知性であり、すなわち学問であり、文化であり、そして産業であり、経済であり、また平和であると。これがナポレオン I 世の残した第 1 の遺訓です。これからは戦争をしてはいけません。これから大事なことは知性であり、学問が大事である。また産業を興していく経済というものが人間の生活の一切の基盤である。そして平和である。平和であるということが、経済を発展させるためにも、学問を興していくためにも不可決の要件である。自分の跡を継ぐ者は、これを一つの大きな命題にせよと、ナポレオンは遺言します。

第 2 に、「イギリスとは戦わない」「イギリスを敵にしてはいけない」ということです。ナポレオンの生涯は、ある意味ではイギリスとの競争でした。イギリスとの戦争でした。イギリスとの覇権争いでした。イギリスに何としても負けたくない。イギリスに追いつき追い越したい。これがナポレオンの目標でした。最後は、イギリスに、ワーテルローの戦いであのウェリントン将軍に敗れてしまいます。ナポレオンはその教訓から、「イギリスと戦ってはいけない」、「イギリスは絶対に敵にしてはいけない」、というのです。彼は次ぎのように言っております。

「イギリスと仲よくやっていくためには、どんな代償を払ってもイギリスの商業上の利益を促進しなければならない。この必然からは 2 つの結果が出てくる、すなわち、イギリスと戦うか、でなければ世界の通商をイギリスと共有するか。今日可能なのはこの第 2 の条件のみである。²¹⁾」

これからの時代は、イギリスと通商上の利益を分け合わなければならない。イギリスと戦うか、それとも世界の通商をイギリスと共有するか、どちらかである。可能なのはイギリスと通商上の利益を共有することである。イギリスとは共存する。これがナポレオン I 世の 2 番目の遺訓でした。

第3番に、「革命の原理を守れ」ということです。フランス革命の原理である「自由」「平等」「友愛」「人権」、この4つを守らなければいけないとナポレオンⅠ世は強調するのです。彼の言葉を引用すると、次ぎのようになります。

「私は死に瀕しつつあった革命を救い、革命の罪悪を洗い清め、栄光に輝くものとして革命を世界に示した。私は、フランスとヨーロッパとに新しい思想を植えた。それらの思想は到底あとへは戻らないであろう。私の息子は私が蒔いた一切のものを花咲かせんことを。」²⁹⁾

すなわち、「私の息子よ、私の跡を継ぐ者よ。この革命の原理、そして革命がもたらした様々な罪悪を私は全部洗い清め、守ったのだ。このフランス革命の原理というものは、これからの時代の潮流であり、絶対に後戻りさせてはならない」。王政を復活させたり、封建制度を再び蘇らせたり、人権を無視したり、そういうことをしてはならない。フランス革命の原理というものを絶対に守っていけど、ナポレオンⅠ世は厳命するのです。

ナポレオンⅠ世の遺訓はいろいろありますが、主要なものはこの3つです。これを後に、甥のナポレオンⅢ世が受け継いでいくことになります。「これからの時代は知性であり、産業であり、平和である」、「イギリスとは戦ってはいけない」、そして「革命の原理を後退させてはならない」と、ナポレオンⅠ世は残すのです。

なお、ナポレオンⅠ世の遺訓で、興味深いものを、あと3点、紹介しておきましょう。

第1に、「英語を学ばなければいけない」ということです。ナポレオンⅠ世は、「英語を学べ」ということを強調します。彼はセント・ヘレナ島に流されて、そこで自分の人生を見つめ直し考え直しますが、そのなかで彼は「英語を学ばなければいけない」ということを痛感します。

ナポレオンⅠ世は、ブリエンヌの幼年学校時代、陸軍士官学校時代、青年期を通じて懸命に勉強をします。特に数学と地理は得意でした。しかし、ただやらなかったことは英語、これを学ばなかったのです。と言いますのは、彼にとっては、まず、フランス語をものにすることが第1でしたし、また、当時、16世紀、17世紀、18世紀の時代はヨーロッパにおいてはフランス語が公用語と言っても良いくらい、フランス語が外交用語になっておりました。フランス語が中

心だったのです。したがって、英語などは、イギリス人が話す、ちっぽけな島国の言語でしかなかったのです。ですから、ナポレオンⅠ世がその絶頂期を極めていたときは英語を勉強しようなどとは夢にも考えておりませんでした。

しかし、イギリスと戦って、イギリスに敗れて、そしてセント・ヘレナ島に流されて、これからの時代の行く末を考えると、彼は「これからは英語である」、「英語を学ばなければいけない」ということに気がつきます。そのことを『セント＝ヘレナ覚書』から引用してみます。

「皇帝は、きわめて規則的に、ご自分の仕事にかかっておられた。英語は彼にとって重要な事柄²³⁾になっていた。」1816年1月28日の日記です。

また1月16日付けの日記には、ナポレオンが次ぎのように言ったと書かれております。

「皇帝は、不意に、英語がまだ読めないのは恥ずかしい、と言われた。(中略) 数学は皇帝がとてもお好きな領域であり、お得意そのものである。」²⁴⁾

さらに1816年1月17日の日記には、

「今日、皇帝は最初の英語のレッスンを受けられた。私の第一の目的は、彼(ナポレオン)に新聞をすみやかに読めるようになっていただく²⁵⁾」ことであった、と書かれてあります。セント・ヘレナ島に流されたとき、ナポレオンⅠ世は、「これからの時代は英語である」、「英語ができなければだめだ」と痛切に感じるのです。

第2に、「中国が動く時、世界は変わる」、とナポレオンⅠ世が認識していたことです。人類の文明は、いわゆる黄河文明とかインダス文明とかナイル文明とかがありますが、中国文明がもたらしたものは非常に大きいものです。火薬、文字、印刷術、羅針盤を発明したのが中国なのは有名な話です。中国はもともと人類の文明発祥の重要な地だったのです。

その後中国は、ヨーロッパの発展に遅れ、近代においてはヨーロッパ諸国に攻められて、「眠れる獅子」と言われた清国が敗れたりしました。しかし、もともとは、中国は人類の文化・文明の先駆を切っていたのです。ナポレオンⅠ世は、古今東西の文献を読み、インド・中国の潜在力を見ぬいていました。それだけに彼は、「中国を眠らせておけ。目を覚ましたら世界を震撼させるはずだから²⁶⁾」とっておりました。彼は、中国が世界を動かす時が再びくることを予見

していたのです。

第3に、琉球についてです。ナポレオンⅠ世が日本という国について、どの程度認識していたかはわかりません。ただ、琉球、沖縄については知っていました。それは、彼がセント・ヘレナ島に流されているときに知ったのです。実は、セント・ヘレナ島というのは、アフリカから遠く離れた北大西洋上の孤島なのですが、昔は航海する船がたち寄る場だったのです。今でこそ本当に辺鄙な島となってしまいましたが、飛行機が出現する以前、船が航海するときはいつもセント・ヘレナ島によって水や食糧を補給したりして、結構栄えていたのです。ナポレオンⅠ世がセント・ヘレナ島にいたときに、すでに数100人の中国人がそこで働いていたという記録があります。昔はセント・ヘレナ島は交通の要所だったといってもよいでしょう。そこにある時、イギリスのライナー号という船の艦長ベイジーフォールという人が立ち寄るんです。そしてナポレオンに会いたい、と申し出ます。ナポレオンⅠ世はベイジーフォールに会います。艦長からナポレオンⅠ世は何を聞いたか。そのやり取りを記した本があるので、そこを紹介したいと思います。²⁷⁾

「1817年8月17日午後2時。ナポレオンがベイジーフォールに会いたいと言ってくる。ベイジーフォールはナポレオンと会見する。部屋に入るとナポレオンは暖炉の前に立って、自分の手で頭を支え、肘を暖炉の柵にかけていた。ナポレオンの最初の質問は『そなたの名前は？』というものであった。私がお答えすると、『ああ、そなたの父を私はよく知っている。そなたの父は私が最初に会ったイギリス人であった。…』。そしてベイジーフォールは『琉球の人々は武器を持っておりません』、こう言った時にナポレオンは『なに、武器が少しもないって？ つまり大砲もなく、彼らは小銃すら持っていないのか？』。『持っておりません。マスケット銃さえ持っておりません、と私は答えた。』『そうか。槍もない、弓もない、というのは本当か？』。私はナポレオンに『どれもこれもございません』と答える。『短刀もないのか？』と声を高くしてナポレオンは叫んだ。『はい』。『しかしだ』とナポレオンは拳を握りながら叫んだ。そしてその声をますます高く上げて、『武器が無くて一体どうやって戦うのだ』。私は、『私が知る限りで申し上げますと、琉球の人々は戦争をしたことがありません』。ナポレオンは、

『なに、戦争がないと？』、まるで軽蔑するかのような、また信用できないような表情をして叫んだ。『この太陽の下で、戦争を知らない人間がいようとは、とんでもない異例のことである。ヨーロッパのことを彼らは知っているのか？』、『いえ、琉球の人はヨーロッパのことは知りません。フランスのこともイギリスのことも知らないのです。陛下のことを聞いたこともないと思います』。ナポレオンはそれを聞いて、心から大笑いをされた。²⁸¹ 　　こういうやりとりです。

琉球には武器がない。その人は戦わない。琉球の人は外交上、人との付き合いが大変に上手かった。こういうことがこの一節からわかるのです。ともあれ、この話にナポレオンは大変にショックを受けたようで、琉球へ是非とも行ってみたい、戦争のないその地を是非訪れてみたいものだ、とナポレオンは回顧するのです。

以上、興味深いと思われる3点を紹介しました。「英語を学ばなければならない」、「中国が動く時、世界は変わる」、「琉球には武器がない」。こういう問題は、現代社会を考えるうえにおいても大変に参考になるのではないかと思います。

ともあれ、ナポレオンはこうしてセント・ヘレナ島でその生涯を終えるのですが、しかし、彼の持っていた力というのは非常に大きなものがありました。とくに意志の強さです。ナポレオンⅠ世の意志の強さは他の何人にも代えがたいものがありました。彼自身、「私は大きな逆運にも負けないように生まれついたと思う。数々の逆運に遭っても私の魂は大理石のように堅かった²⁹¹」、と言って、生きながらにしての死というものを非常に嫌った³⁰¹のです。彼は、「それにしても私の生涯は、なんとというロマンであろうか」、と述懐します。

8. ナポレオンⅢ世の生涯

ナポレオンⅠ世は、1821年、セント・ヘレナ島で亡くなります。ナポレオンⅠ世には一人の子どもがおりました。最初はジョゼフィーヌという女性と結婚するのですが、彼女との間では子どもができませんでした。ただジョゼフィーヌにはオルタンスという女の子と男の子の二人の連れ子がおりました。ナポレオンⅠ世は、自分とジョゼフィーヌとの間に子どもが生まれず、それは自分

の身体に欠陥があるのだろうと半ばあきらめておりました。ところが彼がポーランドに行った時、ある貴族の婦人と一夜を共にします。すると、その婦人との間に子どもが生まれたのです。そこでナポレオンⅠ世は、自分にも子どもをつくる能力があるということに気づきます。すると、なんとしても自分の本当の子どもが欲しい、という気持が高まりジョゼフィーヌを離婚してしまいます。そして、オーストリア皇帝の娘マリー・ルイズと結婚します。その結果、彼女との間に本当の自分の子どもが生まれ、彼がナポレオンⅡ世になります。

ところが、ナポレオンⅡ世は、残念なことに、21歳の時に肺炎に罹って亡くなってしまいます。ナポレオンⅠ世のたった一人の本当の子どもはいなくなってしまうのです。するとボナパルト家はナポレオンⅠ世の兄弟の誰かが継がなければなりません。しかし、ナポレオンⅠ世がセント・ヘレナ島に流された後、フランスでは王政が復活し、「ボナパルト家追放令」が出されます。すなわち、ボナパルト家の一族は皆フランスから出ていかなければならない。ナポレオンの一族は一掃されてしまうのです。ボナパルト一族はヨーロッパ各地を転々とする身になってしまい、ボナパルト家を継ぐと宣言するものはいなくなりました。

その中で、ナポレオンⅠ世の弟にルイという人物がありますが、このルイと、ナポレオンⅠ世の最初の妻ジョゼフィーヌの連れ子の女の子オルタンスが結婚します。そして子どもが生まれる。これがルイ・ナポレオン・ボナパルトであり、ナポレオンⅠ世の甥になります。前述しましたようにナポレオンⅠ世の本当の子ども、ナポレオンⅡ世は、肺炎で21歳の時に亡くなってしまいますので後継者がいなくなるように思えました。しかし、ナポレオンⅠ世の甥であるルイ・ナポレオン・ボナパルトがナポレオンⅠ世のやり残したことを実現するために、起きあがります。彼が、実質的なナポレオンⅠ世の後継者になることを決意するのです。

ここから、ルイ・ナポレオン・ボナパルト、すなわちナポレオンⅢ世の生涯を概観してみたいと思います。彼は1808年パリに生まれます。ナポレオンⅠ世の弟ルイとナポレオンⅠ世の最初の妻ジョゼフィーヌの連れ子オルタンスとの間に生まれました。そして1815年、ナポレオンⅠ世がワーテルローの戦いに敗れ、フランスを追われます。続いて、ボナパルト一家も、追放令によってフラ

ンスにいられなくなり、スイス、ドイツなどを転々とします。ルイ・ナポレオン・ボナパルトも例外ではありませんでした。しかし、彼は各地を転々としながらも、つねにひとつの決意を胸に秘めていました。それは、何としてもナポレオンI世の意志を継いで、フランスに帝政を興そう、ナポレオンの時代を復活させようという強い願望、夢でありました。

そして1836年、ストラスブールというところでナポレオンI世の姿、格好をして、その地のフランス軍の駐屯部隊に入って「ナポレオン万歳！ 皇帝万歳！」とさげぶのです。軍隊にナポレオン時代を想起させ、決起を促がしたのです。ところが軍隊は全く動かず、遂に「何だこの気の狂った男は」、というわけでルイ・ナポレオン・ボナパルトは捕まってしまいます。そしてフランスを追われ、彼はアメリカに渡り、そこからヨーロッパを転々とします。ところが、彼は諦めることなく、1840年に、今度はブローニュというところで再びまた蜂起するのです。これもストラスブールの時と同じように、ナポレオンI世の軍服を着て駐屯軍の中に入って「ナポレオン万歳！ ナポレオン万歳！」とさげびます。しかし、それも失敗に終わり、また捕まってしまいます。そして、アンという牢獄に入れられます。彼は獄中で猛勉強をし、機をうかがって、そこを脱出します。1846年、彼はイギリスに亡命します。

彼がイギリスに亡命して2年後の1848年、フランスで突然「2月革命」が勃発します。その頃のフランスは、「七月王政」というオルレアン家の王様が統治する王政になっていました。そのオルレアン家の支配に対する人々の不満が高じ、「2月革命」という形になって人々が立ちあがったのです。その結果、オルレアン家の「七月王政」は倒され、「第二共和政」という共和国が生まれます。王政が倒れて共和政になったわけですから、さっそく共和国の議会、議員、大統領を選挙で選ばなければならなくなりました。

当時のフランスの選挙法ではボナパルト家のものであっても立候補できるようになったのです。その結果ルイ・ナポレオン・ボナパルトは、イギリスから国民議会の議員に立候補し、当選してしまいます。だが彼は、野心をもっているのではないかという疑惑を懸念して、その当選を辞退します。でも、その後国民議会の補欠選挙が行われますが、それに立候補しまた当選してしまいます。今度は、それを受け入れ、彼はフランスに戻ってきます。

そうした折、いよいよ1848年12月に共和国の大統領を選ぶ選挙が行われることとなります。その選挙に、ルイ・ナポレオン・ボナパルトは挑戦します。その結果、彼は思いもかけず大統領に当選してしまいます。彼が亡命の身から、何故一転して、フランス共和国大統領になれたのか。これにはもちろん彼自身の「ボナパルト家再興」にかける強い思い、決意が働いていたことは事実です。しかし、それと同時に、客観的条件も作動しておりました。といたしますのは、先ほどもお話したように、ナポレオンⅠ世没後フランスおよびヨーロッパでは「ナポレオン伝説」という、「ナポレオン恋しや、ナポレオン恋しや」の声や、「ナポレオンならばどうするか」、といったような風潮が高まっておりました。とくに、七月王政はその体制を強化するために「ナポレオン伝説」を利用しました。その結果、ナポレオンを敬慕する人々の気持は最高潮に盛り上がりました。そうした中で、ルイ・ナポレオン・ボナパルトの存在が段々と知られるようになって、彼こそがナポレオンⅠ世の後継者である、その期待が噴出してくるようになりました。彼に託して、ナポレオンⅠ世の夢を再現しよう、との人々の気持が高揚したのです。その結果、多くの人々が一斉にルイ・ナポレオン・ボナパルトに投票し、彼はナポレオンⅠ世の夢の再現に成功するのです。彼は共和国大統領になりました。

ところが、彼が共和国大統領になって政治を行おうとするのですが、議会のほうでは相変わらず王統派が強く、何かにつけて彼のやることに反対するのです。ルイ・ナポレオン・ボナパルトが何かやろうとすると議会は「反対」「反対」とことごとく邪魔をします。とくに、反動的な議会は普通選挙制を廃止しようとしています。そこで業を煮やしたルイ・ナポレオン・ボナパルトは1851年にクーデタを起こし、議会を閉鎖してしまいます。王統派議員を追い出してしまうのです。そして翌年、1852年にルイ・ナポレオンは皇帝に就任し、ナポレオンⅢ世と名乗って「第二帝政」を開きます。

こうした過程をみますとナポレオンⅠ世の時に似ています。ナポレオンⅠ世は、フランス革命後の第一共和政というその政体がうまく行っていないところからクーデタを起こし、政権を握って、第1統領という大統領になり、やがて皇帝に就任して第一帝政を開きました。今度はナポレオンⅠ世の甥は、2月革命という革命が起こって、共和国が誕生する。その共和政は議会では王統

派が強く、その他の党派も入れ乱れ、政治がうまく機能せず、しかも、何かと大統領のやることに反対する。そういうところから大統領ルイ・ナポレオン・ボナパルトはクーデタを起こして政治権力を奪取してしまう。翌年、皇帝に就任して第二帝政という時代を開く。こうした経過を見ますと、2人のナポレオンがやったことは非常に似ていることがわかります。

ルイ・ナポレオン・ボナパルトは1852年に皇帝に就任し、「ナポレオン三世」と名乗ります。そして、18年間統治します。1870年、「普仏戦争」でプロシアに敗北し、第二帝政は幕を閉じます。「普仏戦争」に敗れてナポレオン三世はロンドンに亡命し、1873年にその地で死去する。彼はこのような生涯を送るので

す。

ナポレオン一世はイギリスと戦って敗れました。ナポレオン三世はドイツと戦って敗退しました。両帝政は戦争によってその幕を閉じたのでした。

9. 2月革命とナポレオン三世

ナポレオン一世はフランス革命から誕生しましたが、ナポレオン三世は2月革命から生まれました。共に「革命の落とし子」です。フランス革命がなければナポレオン一世は誕生しなかった。同じように1848年の2月革命がなければナポレオン三世は生まれなかったかもしれません。二人のナポレオンは共に「革命の産物」、革命の中から生を受けた、と言っても過言ではないのです。

ナポレオン一世の跡を継ぐのはナポレオン二世のはずだったわけですが、ナポレオン二世は若くして亡くなってしまいました。また、ナポレオン一世の兄弟は誰もボナパルト家の継承を引き受けませんでした。結局ただ一人、ナポレオン一世の甥のルイ・ナポレオン・ボナパルトがナポレオン一世の跡を継ぐことになったわけです。このことを予見するかのようなエピソードがあります。それは、1815年6月、ワーテルローの戦いが始まる前です。次ぎの文章を紹介したいと思います。

「作戦を練っているナポレオンの膝の上に7歳のルイ・ナポレオン・ボナパルトが涙を浮かべて座る。『どこか悪いのか』とナポレオンは尋ねた。『家庭教師が、皇帝が戦争に行くと教えてくれました』。『いけないかい。私が

戦争に行くのは初めてではない。泣く必要はない。私はすぐ帰ってくるよ。『叔父上、邪悪な連合諸国はあなたを殺そうとしております。お願いです。私を連れて行ってください』。その場にいた者は皆深く感動した。ナポレオンは『子どもを部屋から出さない』と静かに命じた。そして『多分、彼が私の家系を継ぐ唯一の頼みの綱になるであろう』³¹⁾と言った。

こういう場面があるのです。

まさか1815年のこの時点で、ナポレオンⅠ世の跡を誰が継ぐのか、誰もわかりません。まして、ナポレオンⅠ世が敗れるとも決まっていない。そういう時に、このルイ・ナポレオン・ボナパルトが伯父に「連合諸国があなたを殺そうとしている。どうか私を連れて行ってください」、と言うのです。ナポレオンⅠ世は「子どもを部屋から出さない」と静かに命じ、そして、「恐らくルイ・ナポレオン・ボナパルトがボナパルトの家系を継ぐ唯一の頼みの綱になるだろう」と、予見するのです。この予見のどおり、ルイ・ナポレオン・ボナパルトはナポレオンⅢ世としてナポレオンⅠ世の跡を継ぎます。ナポレオンⅠ世の遺志を強固に守り、その夢の実現を果たしていくのです。

ナポレオンⅠ世が後世に残した教訓がありますが、それをルイ・ナポレオン・ボナパルトは堅く守るとともに、さらにナポレオン帝国の発展を期していきます。ナポレオンⅠ世残した遺言を確認しておきたいと思います。

「私の息子は私の死の復讐をしようと思っはならない。私の死を利用すべきである」。「私は死に瀕ししつあつた革命を救い、革命の罪悪を洗い清めた」。「私の息子は新しい思想の人間にならなければいけない」³²⁾。

「私の復讐をしようと思っはならない。むしろ私の死を利用すべきである、とナポレオンⅠ世は言います。私を最大限に利用していきなさい。そして革命の原理を守り、また革命で多くの人を殺したその罪を洗い清めていくことが大事である。私の息子は新しい思想の人間でならなければならない」³³⁾。

これがナポレオンⅠ世の遺訓であり、それをナポレオンⅢ世は心に銘記していくのです。

10. ナポレオン三世の業績

では、ナポレオン三世は皇帝としてどういう業績を残していったのでしょうか。第二帝政の実績を概観してみることにしましょう。

第1番目は、「普通選挙制の実施とその定着」です。この時の普通選挙制というのは女性には選挙権を与えませんでした。18歳以上のすべての成年男子に選挙権を与えるというものでした。これをナポレオン三世は執拗に守っていく。これは、「権力は人民からくる」というフランス革命の原理から、人民に選挙権を認めるのが、その具体的方途である、との信念になったものです。これナポレオン三世は厳守するのです。

また別の観点からいうと、普通選挙制は、ナポレオン三世にとって、現実的な効用をもつものでした。自分が国民議會議員に選ばれたのも、また共和国大統領に選ばれたのも普通選挙制があったからこそであります。こういう自分の原点ともいうべき普通選挙制の原理、これはナポレオン一世の「革命の原理を守れ」との言葉を固守すると同時に、自分を共和国大統領にまで押し上げてくれた普通選挙制は、ナポレオン三世にとって、絶対になくすことはできないよい制度でした。これを彼は、実施し、定着させていったのです。

第二帝政以後、フランスの選挙制度は制限選挙という形になったことはありません。以来、一貫してフランスでは普通選挙制度がとられてきました。第二帝政はフランスの普通選挙制の定着に大きな貢献をなしたのでした。

第2番目は、「経済的繁栄」です。これもナポレオン一世の遺言、すなわち「これからは知性、産業、平和である。経済の発展である」という言葉の厳守でした。ナポレオン三世は、ナポレオン一世の遺訓に従い、工業生産に非常に力を入れました。ナポレオン三世の時代に、年平均2～3%の経済成長が長く続いていったと言われております。ナポレオン三世は労働者の生活状況を改善し、とくにオルレアン家の財産を没収して労働者の共同住宅を作るということをしました。経済成長をはかると同時に福祉事業にも力を入れたのです。³⁴⁾

第3番目は、「外交上の平和」です。ナポレオン三世は、「馬上のサン・シモン」といわれ、産業生活、「貧困の撲滅」に多大の貢献をしました。ナポレオン一世は戦争に次ぐ戦争でした。しかし、ナポレオン三世はほとんど戦争をやっ

ておりません。あえて戦争らしい戦争といえばロシアと戦った1854～56年の「クリミア戦争」ぐらいです。

クリミア戦争というのは、ロシアがトルコを攻めたことから始まりました。ロシアは寒くなると港が凍ってしまう。そのため凍らない港を求めて南のトルコに降りてきます。トルコを攻めるのです。東洋への重要な戦略的位置を占めるトルコがロシアの手中になるということは大変な問題であるということで、イギリスとフランスが共同してトルコを助け、ロシアと戦います。これがクリミア戦争です。これぐらいがナポレオン三世が戦った大きな戦争といえるものです。

その他、ナポレオン三世はインドシナ、中国、そして日本へと拡大の網を広げますが、しかしそれが激しい戦争になったということはありません。また、メキシコにも発展の基盤を作ろうといたしますが、これも特に激しい戦争というものではありませんでした。総じて、ナポレオン三世はナポレオン一世の遺言を守り、「これからは平和でなければいけない」、「戦争はいけない」ということを頑なに守るのです。また、「イギリスと戦ってはいけない」「イギリスとは協調していかなければならない」ということも肝に銘じます。このクリミア戦争ではイギリスとの協調路線をとります。ナポレオン三世の時代は、全体的には外交上の平和が保たれた時代だったと言ってよいでしょう。ただ、平和を守ったナポレオン三世が、最後は、プロシアとの戦争でビスマルクに破れ、敗退したのは皮肉でした。

第4番目は、「社会事業の推進」です。これはさきほど少し触れましたけれども、七月王政のオルレアン家もっていた財産を没収して労働者の共同住宅をナポレオン三世はたくさん建てます。また、社会事業も展開します。第二帝政の時代に、社会福祉事業が非常に進んだと言われております。

第5番目は、「鉄道網の拡大」です。ナポレオン三世は鉄道建設に非常に力を入れます。彼が皇帝になる前のフランスの鉄道は、3083kmしかなかったのですが、皇帝になってから、1856年には、6281kmに拡大しました。これによって、フランスの産業の発展の基盤が大きく作られました。

第6番目は、「パリの整備」です。ナポレオン三世はパリの大改造を図っていきます。ナポレオン一世は「パリを世界一、美しい街にする」との目標をたて、

パリの改造に取り組みました。しかし、彼の事業は志半ばで途絶えてしまいました。その後をナポレオン三世は受け継ぐのです。オスマン男爵をパリのあるセーヌ県の知事に任命し、彼に命じてナポレオン三世はパリの大改造を推進しました。彼オスマン男爵の父は、ナポレオン一世の軍隊で彼の部下でした。ナポレオン一世に非常に忠実だったのです。そのせいか、オスマン男爵もナポレオン三世に忠誠を尽くし、皇帝のいう通り、否、それ以上にパリの街の大改造に取り組んだのです。その結果、パリの街は整然と整備された大変に美しい街へと生まれ変わったのです。道路も広くなったため、革命のような騒乱も起こらなくなりました。

第7番目は、「万国博覧会の開催」です。ナポレオン三世は、1855年、第2回目の万国博覧会、1867年、第4回目の万国博覧会という2つの万国博覧会を開催し、フランスの国威発揚に努めました。

以上が、ナポレオン三世の主たる業績であり、これによって、フランスは近代国家の土台が強固になったといわれております。たとえば、フランス研究史家ロジャー・プライス (Roger Price) は、次のように指摘しております。「第二帝政はさまざまな面で国民から広く支持された政体だった。とくに法と秩序を守る方針を明確に示したことで、自由主義的な制度を導入したことは、国民の支持を高めた。それまで政府と社会的エリートが危険視していた普通選挙制度が導入されたのもこの帝政期であり、この普通選挙制導入によって、支持であれ苦情申し立てであれ投票によって表明することが制度化されたために、あたかも『民主主義』によって『革命』が不要になったかのよう³⁶⁾に思われ始めた」と。ナポレオン三世は、凡庸とした印象を与えておりますが、行政運営能力は大変優れており、行政の細部にまで目を行き届かせ、政治のスムーズな運営をはかりました。ナポレオン三世の業績により、フランスは近代国家へと発展していったのです。

少し話が戻りますが、ナポレオン三世の外交上のエピソードをひとつ紹介しておきたいと思ひます。彼の外交政策の遂行を担った外務大臣は誰か。さきほど少しお話いたしましたナポレオンがポーランドに行った時にその地の貴族の婦人と一夜を共にします。それにより子どもが生まれました。その子ども、すなわちナポレオンの本当の子どもですが、認知されませんでした。したがっ

て、庶子というかお妾さんの子どもという形になってしまうのですが、実際はナポレオンⅠ世の子どもです。ヴァレフスキーと名付けられます。このナポレオンⅠ世の子ども、ヴァレフスキーという人は大変に優秀で、ポーランドを離れフランスに亡命し、フランスで学びます。そしてルイ・ナポレオン・ボナパルトがクーデタを起こして皇帝になった時、彼に接近して、何と第二帝政下の外務大臣に任じられます。外務大臣としてナポレオンⅢ世の外交政策の推進に手腕を発揮するのです。じつに、面白い人間関係です。

ナポレオンⅠ世の甥が皇帝になり、ナポレオンⅠ世のお妾さんの子とはいえ本当の子どもがその外務大臣となって活躍をする。ナポレオンⅢ世という人はちょび髭を生やしてあまりうだつの上がらない顔をしているんですが、このナポレオンⅠ世の本当の子ども、ヴァレフスキーは姿・形がナポレオンⅠ世にそっくりで、初めて会った人は彼のことをナポレオンⅢ世と間違えたというくらい、それほどナポレオンⅠ世に似ていたと言われております。ナポレオンⅠ世の本当の子どもですから当然かもしれません。歴史というのは、私たちの想像を超えたところで面白い事態を引き起こすものです。

11. ナポレオンⅠ世から受け継いだもの

ナポレオンⅢ世が、「ナポレオンⅠ世から受け継いだもの」は何でしょうか。それを確認しておきたいと思います。

第1番目は、「政治権力の正当性は人民からくる」という原理であります。政治権力の淵源は人民にある。これがナポレオンⅠ世の信条でした。フランス革命が投げかけた思想でもありました。この人民主権原理の具体化のひとつが、普通選挙制の実施ということになります。ナポレオンⅢ世は、それだけに普通選挙制に固執したのです。

第2番目は、「権力は強くなくてはいけない」。権力は弱くあつてはいけない、ということです。権力が弱ければ政治的諸党派の抗争する中であつて、社会や国家を強固に打ちたてられなくなってしまいます。

第3番目は、「権力は人のために、人民のために行使されなくてはならない」ということです。これもナポレオンⅠ世が、「人民主権というのは人民の利益の

ために使われるべきである」と言ったことに通ずるわけであります。そのために、社会事業、福祉事業をナポレオン三世は遂行しました。

第4番目は、「権力はフランスの栄光のためにある」ということです。フランスの栄光を飾るものこそが、権力なのです。ナポレオン三世は、そのために平和外交に、万国博覧会の開催に力を入れたのです。

12. むすびに

ナポレオン I 世と三世の人物像を比較しておきたいと思ひます。³⁶⁾ 第1に、「カリスマ性」、すなわち人を引きつける魅力の問題です。この点から見ますと、ナポレオン I 世は非常にカリスマ性に富んでいた。それに対してナポレオン三世にはそれがあまり見られません。ナポレオン I 世は、たとえば演説が上手い。彼が馬上に乗って戦場に現れるだけで何十万という軍隊が現れたと思わせるくらい彼には不思議な威光があったといわれております。これに対してしナポレオン三世にはそのようなカリスマ性はあまり見られません。戦争をあまりやらなかったので、戦功もない。歴史に残る名言も吐いていません。むしろ凡庸な、何を考えているかわからないという印象を与えております。

第2に「活字によるアピール力」です。これは、ナポレオン三世の方が優れています。ナポレオン I 世はあまり本を書いておりません。せいぜい『セント・ヘレナ日記』という口述筆記したものがあるくらいです。民法典の編纂に力を入れましたけれども、これは本ではありません。それに対して、ナポレオン三世は次から次へと本を出しました。『貧困の撲滅』、『ナポレオンの思想』、こういう活字によるアピール力という点から言いますと、ナポレオン三世は卓越した力をもっていたのです。

第3に、「行政手腕」です。これはナポレオン I 世もナポレオン三世も共に優れた力をもっていました。とくにナポレオン三世という人は、何度もうのように、一見凡庸としていて捉えどころのない、何を考えているかわからない、本ばかり書いている、こういう学者みtainなタイプの人なのですが、しかし、実体は違うようです。彼は行政の細々とした、小さなことまで実によく知悉していたといわれております。そして産業、経済の発展、鉄道事業の推進をはか

りました。ある意味ではナポレオンⅠ世よりもナポレオンⅢ世のほうが行政手腕は優れていたのではないかと、とも言われております。

ともあれ、これまで、話をしてきたなかで私が強調したいことは2点あります。第1は、「ナポレオン」と言いますと通常私たちはナポレオンⅠ世のことを思い浮かべますけれども、実はこの19世紀の中頃に現れた「ナポレオンⅢ世」、これもまたナポレオンⅠ世に劣らぬほどの力を発揮して近代国家フランスの基盤を作ったということです。したがって「ナポレオンの時代」という場合、是非、ナポレオンⅠ世とナポレオンⅢ世とこの二人をあわせて理解していただければと思います。ここでは、二人あわせてその時代を「ナポレオン帝政」と呼んでおきます。

第2は、このナポレオン帝政こそが、フランス革命の原理に基づき、近代フランスという国民国家の土台を築いたということです。ナポレオン帝政については様々な見方があります。革命を退化させた、独裁であった、たんなるポピュリズムにすぎない、そして、歴史的進歩、発展経過から見ると逸脱だったなどの批判が寄せられています。しかし、私は、ここでは、今までみてきたように、両ナポレオンの業績によって近代フランスの国家の土台が築かれたと主張しておきたいと思えます。ナポレオン帝政がなければ、フランス革命の原理や成果は否定もしくは退行させられてしまったかもしれません。両帝政の出現は、歴史を発展させる必然だったのです。

最後に、「英雄が時代を創るのか、または、時代が英雄を求めるのか。今、混沌とする時代にあって、新しい時代を拓き、新しい社会を構築する真のリーダーの台頭が希求されている」と結んでおきたいと思えます。私たちも、これからの時代に向かって理想、夢、希望、意志、それでもって時代を創っていこう、より良い社会にしていこうと、両ナポレオンを通して学んでいきたいと願います。

注

- 1) 本稿の論述にあたっては、以下の拙書がもとになっている。そこでの主張をまとめ、さらに発展させたのが本稿である。『近代フランス政治史』（北樹出版、2003年）、『ナポレオンⅢ世とフランス第二帝政』（北樹出版、2004年）、『ナポレオン入門Ⅰ世の栄光とⅢ世の挑戦』（第三文明社、2008年）。これらの書の中に、ナポレオン関係の資料はかなり取めら

れているので、本稿では、参考文献については、直接引用した場合などは除いて、いちいち例示しなかった。主要なものは、前述の3著を参考にさせていただきたい。

- 2) この点に関しては、次の書が参考になる。Owen Connelly, *The French Revolution and Napoleonic Era, Harcourt College Publishers*, 2000. ちなみに、オーウェン・コネリー教授は、アメリカにおけるナポレオン研究の第一人者といってよいであろう。
- 3) ロジャー・プライス (河野肇訳) 『フランスの歴史』(創社、2008年)、122-202頁が、この時代の政治、経済、社会的背景をふまえて分析している。
- 4) オクターヴ・オブリ編 (大塚幸男訳) 『ナポレオン言行録』(岩波書店、1983年) 197頁、200-201頁の記述にこの趣旨をくみとることができる。
- 5) オクターヴ・オブリ、前掲書、269頁。
- 6) 本池立「ナポレオン帝国」柴田・樟山・福井編『フランス史2』(山川出版社、1996年)、421頁。
- 7) Ben Weider, *Napoléon Liberté-Égalité-Fraternité, Les Éditions de l'Homme*, 1977, P.148.
- 8) Lucian Regenbogen, *Napoléon A Dit, Aphorismes, citations et opinions, Les Belles Lettres*, 1996, P.267.
- 9) Owen Connelly, *op. cit.*, P.217.
- 10) Jean Tulard, *Napoléon ou le myth du sauveur, Fayard*, 1987, P.261.
- 11) Alistain Horne, *The age of Napoleon, The modern Library, New York*, 2004, P.75.
- 12) Owen Connelly, *op. cit.*, P.P.226-227.
- 13) こうした主張は、オクターヴ・オブリ、前掲書、190頁のナポレオンI世の言説からよみとることができる。
- 14) オクターヴ・オブリ、前掲書、114頁。
- 15) オクターヴ・オブリ、前掲書、190頁。
- 16) アンドレ・ユルカー編 (小宮正弘訳) 『ナポレオン／自伝』(朝日新聞社、2004年) 65頁。
- 17) ラス・カーズ編 (小宮正弘訳) 『セント・ヘレナ日記抄』(潮出版社、1999年) 144-145頁。
- 18) ラス・カーズ (小宮正弘編訳) 『セント＝ヘレナ覚書』(潮出版社、2006年) 303頁。
- 19) オクターヴ・オブリ、前掲書、259頁。
- 20) オクターヴ・オブリ、前掲書、208頁から、この趣旨を読みとれる。
- 21) オクターヴ・オブリ、前掲書、208頁。
- 22) オクターヴ・オブリ、前掲書、208頁。
- 23) ラス・カーズ (小宮正弘編訳)、前掲書、123頁。
- 24) ラス・カーズ (小宮正弘編訳)、前掲書、119頁。
- 25) ラス・カーズ (小宮正弘編訳)、前掲書、119頁。
- 26) この指摘は、ビル・エモット『アジア三国誌 中国・インド・日本の大戦略』(日本経済新聞社、2008年) 364頁にある。
- 27) 大熊良一訳著『セント・ヘレナのナポレオン』(近藤出版社刊、1989年)
- 28) 大熊、前掲書、30-65頁の記述を筆者なりにまとめ直して、記載した。

- 29) オクターヴ・オブリ、前掲書、241頁。
- 30) オクターヴ・オブリ、前掲書、244頁。
- 31) F. A. Simpson, *The Rise of Louis Napoleon*, Frank Cass & Co. LTD., 1968, P.32.
- 32) オクターヴ・オブリ、前掲書、207頁。
- 33) オクターヴ・オブリ、前掲書、214頁。
- 34) 鹿島茂『怪帝ナポレオン三世 第二帝政全史』（講談社、2004年）210-258頁。
- 35) ロジャー・ブライス（河野肇訳）、前掲書、266-267頁。
- 36) 第一帝政と第二帝政を比較したものに、拙稿「フランス帝政の類型比較 — 第一帝政と第二帝政」『創価大学通信教育部論集 第7号』（創価大学通信教育部学会、2004年）がある。